Japan Association for the Study of School Music Educaitonal PracticeJapan Association for the Study of School Music Educai

いろいろな障害のある子どもに対し、楽器活動をどのように行うか

齋藤一雄（上越教育大学）

いろいろな障害のある子どもを対象として、様々な音楽活動が展開されているが、そのなかでも、楽器を使った音楽活動は大きな割合を占めている。使用する楽器の種類も、打楽器（手やばちでたたく・打つ・こする・振る等）・吹奏楽器（吹く）・弦楽器（はじく・こする・たたく）・鍵盤楽器（ばちでたたく・鍵盤を弾く）・自作の楽器など様々である。また、楽器活動には、歌唱とともに楽器を扱う、歌唱の一部を楽器で演奏する、楽器を使って合奏するなど、幅広い活動が考えられる。

楽器活動をどのように指導するかという点では、音楽の形式や決まりなどの理解、楽器活動における実態把握、楽器活動のねらいと子どもの目標の明確化、指導計画の立案、子ども集団の編成や教師集団の役割分担、楽器や音楽の選択と編曲、絵譜・楽譜や教材教具の工夫、教師の適切な支援や評価など、多くの視点が考えられる。

そこで、どのような楽器を取り上げてどのように扱っているか、子どもの反応や変化はどうか、音楽教材の選択や編曲はどのように行ったらよいか、具体的な支援をどのように行ったらよいかなどを話題の柱として議論した。

1. 話題提供

尾崎祐司（石川県立医王養護学校）さんから、知的障害養護学校や病弱養護学校での楽器を使った音楽活動について、実践を紹介していただいた。

①知的障害養護学校高等部「即興で楽しむいろいろな音階」:鍵盤の取り外しが可能な木琴によって、特定の音だけで構成されている五音音階やブルース音階などを教師のピアノによるオスティナートやアフタービートの伴奏に合わせ、即興演奏を行う。

②知的障害養護学校高等部「アルペンホルンを作って演奏しよう」:アルペンホルンは、長い楽器で、生徒の興味関心をひく楽器である。しかも、工作用紙で自作できることから、複数の生徒で共同して楽器作りを行い、作品展で演奏会を行った。

③病弱養護学校高等部「デジタルパーカッションパッドを取り入れたエレクトリックバンド」:筋ジストロフィー症の生徒の筋力でも操作できるマレットを開発し、デジタルパーカッションパッドによるポピュラー音楽の演奏、音楽に合わせたエア・ギターなどを行った。

2. 討議内容

話題提供の内容に関して参加者から、アルペンホルンのマウスピースによる音出しのむずかしさ、スライドさせて音程を変えるトロンボーンのおもしろさ、木琴よりも大きな楽器による即興演奏はどうか、楽器操作のむずかしい子どもには電子楽器が有効などの質問・意見が出された。

また、子どもたちの実態に合わせて楽器が簡単に操作できるように、補助具を開発したり、楽器を改造したりすることについて、意見交換や実践の紹介が行われた。たとえば、肢体不自由の子どもを対象に、ばちの代わりにゴムひもの先にテニスボールをつけて、手を離すと太鼓が鳴る仕組みを作ったり、ツリーチャイムにカラーフープをつなげ、音を出しやすくする工夫をしたりなどが紹介された。

しかし、楽器活動をどんなねらいで行うのか、小学部の段階では、興味関心を引き出すこと、音を出すことを楽しむこと、曲を表現するなかで一部でも役割をはたすことなどをねらいとして、楽器の選択や指導計画を立案することが重要ではないかという議論もあった。その一例として、ドローンの音に合わせて楽器を鳴らしたり、ライヤーやクロマハープをかき鳴らしたり活動が紹介された。

どんな曲に合わせて楽器活動を行うかという点では、知っている曲、イメージの持ちやすい曲、音楽療法で使われる曲があがった。時計を見せて「シンコペイテッド・クロック」、かわいい「子犬のマーチ」、電車の好きな子にクワイヤホーンを使って「線路は続くよどこまでも」などが紹介された。

3. 今後の課題

しかし、楽器から逃げる子、演奏技術の面でくじけてしまう子、聞き入ってしまって楽器に手を出さない子、自閉傾向があり耳をふさぐ子など、いろいろな障害あることで、なかなか楽器活動に参加できない子どもたちがいること、そのような子どもたちへの支援の問題などが課題として残った。

NII-Electronic Library Service